

③③直轄高知海岸「新居工区」堤防耐震・液状化事業

受賞機関 国土交通省 四国地方整備局 高知河川国道事務所

<評価>

南海トラフを震源とする地震に備え、地震後の津波に対して海岸堤防としての機能を果たせるよう、海岸堤防の耐震・液状化対策を行った事業。海岸浸食の状況や後背地の土地利用状況など制約条件の多いなか、海岸利用状況に配慮するなど工法を工夫した点が評価された。

はじめに

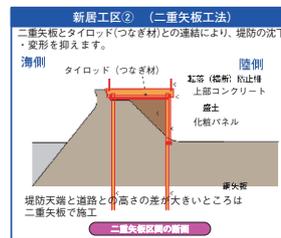
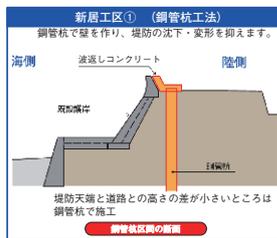
四国地方では南海トラフを震源とする巨大地震が、今後30年以内に約70%の確率で発生すると言われている。地震及び地震後の津波に対して、海岸堤防としての機能を十分果たすことができない直轄高知海岸新居工区の地震・津波対策を、平成24年度から着手し、平成26年度に完成した。

事業の概要

直轄高知海岸新居工区は、仁淀川河口の西側に位置する砂浜海岸を有し、昭和40年代に整備された海岸堤防は、その後修築・改築を繰り返し現在に至っている。

本工区では、海岸浸食が進行していること、海岸堤防背後には県道と住宅が密集しており、海岸堤防の前だしや引堤といった海岸堤防法線の変更は不可能であることなどから、現位置で既存海岸堤防の高潮機能を保持しつつ改築可能な地震・津波対策工法とする必要があった。

そのため、背後地の状況や堤防の形状により二重矢板工法と鋼管矢板工法の2種類で施工することとした。特に、二重矢板区間ではパラペット構造とせず、海岸堤防天端をフラットにすることで海岸線の眺望を確保した。また、仁淀川右岸堤防と連続して整備したことで、散策路として利



新居工区における対策工法

便性を向上させた。

おわりに

海岸堤防の整備完了後、背後地に土佐市の交流施設や津波避難タワーが整備され、地域の交流人口の増加、イベントの開催、海岸利用者の津波安全度の向上等が図られている。

今後は、戸原工区、長浜工区、南国工区の地震・津波対策を早急に完成させるとともに、海岸浸食の進行を食い止めるため突堤や離岸堤などの沖合施設と養浜による高潮・高波対策を進め、地域住民のさらなる安全・安心の確保を行っていく。

賛助会員 岩田地崎建設(株)、(株)建設技術研究所、日本国土開発(株)、パシフィックコンサルタンツ(株)

③④白川熊本市街部河川改修事業（緑の区間）

受賞機関 国土交通省 九州地方整備局 熊本河川国道事務所

<評価>

白川の川面に写る緑などが「森の都くまもと」の象徴的な場所で、治水と景観や緑の保全の調和を図りながら、護岸、樹木、スロープ等の河川整備を行った事業。検討から施工段階まで、有識者、施工者や地元住民が参画した検討会などで議論をしながら進め、都市部の河川改修を効果的に推進した点が評価された。

はじめに

白川は、熊本市中心市街部を貫流するとともに周囲の地盤が川より低く位置していることから災害ポテンシャルが非常に高く、これまで度重なる洪水被害に見舞われてきた。

特に、白川の大甲橋～明午橋間（通称：緑の区間）においては、河岸にクスノキやエノキ等の樹木が繁茂しており、白川の川面に映る木の緑と遠方に見える立田山を望む風景は「森の都くまもと」の象徴的な景観を有し、熊本市民の憩いの場である一方で、熊本市街部において治水上の懸案箇所となっていた。

事業の概要・成果

緑の区間については、昭和61年に一度河川の改修計画を発表したところであるが、この樹木が消滅することとなり、地域住民や文化団体等多くの意見をいただき、議論を重ねた。平成14年の白川水系河川整備計画において現存する樹木をできる限り残すこととし、地域住民の意見を取り込みながら、植生による緑地整備や都市空間での水辺づくりに取り組むこととした。地元の代表者や専門家に緑の区間の設計の基本的な考え方について提案をいた



緑の区間完成写真

くために、「白川市街部景観・親水検討会」を立ち上げ基本的な考え方をまとめた。平成18年度からは、「白川市街部景観・利活用検討会」を設置し、具体的な計画づくりや施工後の利活用、維持管理について検討を進めており、平成27年4月に竣工した。

おわりに

平成24年7月の九州北部豪雨の際、緑の区間においても堤防整備が進んだことによりこの地区からの氾濫は発生せず、一定の治水効果を上げることができた。また、平成27年4月の竣工式に併せて「ミズベリング白川74」を実施した結果、4日間で約1万人と大盛況であった。

今後、当区間が熊本市街部の憩いの場となることに対して大きな期待が寄せられている。

賛助会員 (株)建設技術研究所、(株)東京建設コンサルタント